

編集後記

昨年の中越地震からまもなく1年が過ぎようとしています。今回の中越地震は、日本の大部分を占める中山間地で発生したのですが、中越地域は日本でも有数の豪雪地帯であり、また日本有数の地すべり地帯であったことも、被害をいっそう重大でかつ長期化させる事にもつながりました。

中越地震以降もスマトラ沖の巨大地震と未曾有の津波被害を始め、日本では福岡県西方沖地震や東京都でも震度5に達する地震が発生するなど、大きな地震が頻発しており、日本列島が地震の活発な時期に入ったとの見方が強まっています。被災地の1日も早い復興への努力とともに、今回の震災に学んで、備えを行っていききたいものです。

新潟大学中越地震調査団の活動は、資料編に掲載されているように、多くの学会との連携・協力のもとに進められました。それ以外にも地質コンサルタントや防災関連の会社に勤務されている方々も協力、参加されました。本報告書にはそうした報告も掲載されています。また、国土地理院や国際航業（株）、パスコ（株）は、災害対策用地図、崩壊解析図などを寄贈されました。これらは調査団の活動に多いに役立ちましたことを銘記し、感謝します。

ところで、日頃の研究においては、実は災害とは殆ど関連がなかったのですが、日本海東縁変動帯や北海道における衝突テクトニクスにあって携わっていたこともあり、また、災害分野の専門の方々は連日の調査で追われていることもあって、事務局長を引き受けました。災害の専門家ではないのでどこまでできるか不安もありましたが、ここに報告書をまとめ上げる事ができ、肩の荷を軽くする事が出来そうです。

今回の事務局の仕事を続けながら痛感したのは、我々人間が生存している足下の地球について、人類は最近、ようやくその鼓動やリズムの実態について理解し始めたばかりだということです。地球表層の様々な変動をグローバルに理解する事が出来るようになったのは、プレートテクトニクスが提唱されてからで、まだ30年あまりしか経っておらず、地球の深部、核まで含めたダイナミックな運動像についての学説、ブルームテクトニクスに至ってはまだ10年を少し越えたばかりで、最近では全球凍結といった1大事が過去に生じたとの説も提唱されています。人類の長期的生存と戦略のためには、足下の地球について、深く理解する事がとても重要ではないでしょうか。

「死都日本」という小説が刊行されて話題となりましたが、同じ著者による小説「震災列島」が刊行されたのは中越地震の発生前日でした。これらは小説とはいえ、現実に起こりうる事態をかなり正確に描き出しており、専門家の間でも多いに話題となっています。特に前者は破局的な噴火「カルデラ噴火」によって引き起こされる恐るべき被害の様子を生々しく描き出しています。しかし、これは決して架空の話ではなく、これまでの地質学的歴史を辿ると、必ず起こる出来事なのです。短い周期で襲ってくる巨大地震、それよりは長い周期（一万年前後）で襲ってくる破局的カルデラ噴火、さらに長い周期でいうと氷河期の来襲など、地球は様々な周期のリズムを奏でているのです。

本報告書が、震災からの復興と防災に役立つことを願うとともに、生きている地球への関心を高める事につながれば幸いです。最後に、震災による犠牲者の冥福を祈りますとともに、1日も早い復興を願っています。

2005年7月
中越地震新潟大学調査団 事務局長
宮下純夫